

東西宗教交流学会第43回（2025年度）大会

引き裂かれるイスラーム：分断志向と統合志向の間で

飯塚正人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

0. はじめに

世界の分断化状況に宗教は責任があり、なおかつ統合へと向かうベクトルも有しているはず。ここでは、イスラーム思想における異教徒との関係およびジハード（戦争あるいは「テロ」）を題材に、イスラームの責任と（あるとすれば）その役割について考える。

1. 聖典クルアーンに見る「人類」と「啓典の民」

「人類は（もともと）一族であった。それでアッラーは、預言者たちを吉報と警告の伝達者として遣わされた。またかれらと共に真理による啓典を下し、それで、人びとの間に異論のある種々の事に就いて裁定させられる。こうしてかれらに明証が下っているにも拘らず、（啓典を）授けられた者たちは、かえって互いのために争ったのである。アッラーは、かれらが異論を唱える真理に就いて、信仰する者を特別の御許しで導かれる。本当にアッラーは、御心に適う者を正しい道に導かれる」（2章 213 節）

⇒争う「啓典の民」

「ユダヤ人は言う。「キリスト教徒は、全く拠るところがない。」キリスト教徒も、「ユダヤ人は全く拠るところがない。」と言う。かれらは（同じ）啓典を読誦しているのに（以下、省略）」（2章 113 節）

「かれらは、「ユダヤ人とキリスト教徒の外、誰も樂園に入れないだろう。」と言う。それはかれらの（虚しい）望みである。言ってやるがいい。「もしあなたがたが真実なら、証拠を出してみなさい。」（2章 111 節）

⇒こうして、イスラームを正当化したうえで「啓典の民」を評価

「本当に（クルアーンを）信じる者、ユダヤ教徒、キリスト教徒とサービア教徒で、アッラーと最後の（審判の）日とを信じて、善行に勤しむ者は、かれらの主の御許で、報奨を授かるであろう。かれらには、恐れもなく憂いもないであろう。」（2章 62 節）

「われは真理によって、あなたがたに啓典を下した。それは以前にある啓典を確証し、守るためである。それでアッラーが下されるものによって、かれらの間を裁け。あなたに与えられた真理に基づき、かれらの私慾に従ってはならない。われは、あなたがた各自のために、聖い戒律と公明な道とを定めた。もしアッラーの御心なら、あなたがたを挙げて1つのウンマになされたであろう。しかし（これをされなかったのは）かれがあなたがたに与えられたものによって、あなたがたを試みられたためである。だから互いに競って善行に励め。あなたがたは挙って、アッラーに帰るのである。その時かれは、あなたがたが論争していたことに就いて、告げられる。」（5章 48 節）

*インド進出をきっかけに、「啓典の民」には仏教徒やヒンドゥー教徒も含まれることに
cf.) 一神教の国インドネシア（統合へと向かうベクトル）

2. 聖典クルアーンに見る「ジハード」

「戦いをし向ける者に対し（戦闘を）許される。それはかれらが悪を行うためである。

アッラーは、かれら（信者）を力強く援助なされる。」（22章 39節）

* 戦闘が許可された最初の啓示。しかし以後、戦闘は義務として語られるように

「あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは、侵略者を愛さない。」（2章 190節）

【参考】中田考氏による日本語訳「汝らと戦う者に対して、アッラーの道において戦え。ただし度を越えてはならない。アッラーは度を越える者を愛で給わない。」

「戦いがあなたがたに規定される。だがあなたがたはそれを嫌う。自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。また自分のために悪いことを、好むかもしれない。あなたがたは知らないが、アッラーは知っておられる。」（2章 216節）

⇒戦うべき相手や戦闘終了の条件も具体的に語られる

「アッラーも、終末の日をも信じない者たちと戦え。またアッラーと使徒から、禁じられたことを守らず、啓典を受けていながら真理の教えを認めない者たちには、かれらが進んで税〔ジズヤ〕を納め、屈服するまで戦え。」（9章 29節）

* 「啓典の民」以外と戦え & 「啓典の民」とはジズヤ徴収まで戦えという意味？

「だから、多神（注：多神教徒による宗教的迫害ともいわれる）がなくなるまで、また（かれらの）教えが、凡てアッラーに向けられるようになるまで、かれらと戦え。だがかれらがもし（敵対を）止めるならば、本当にアッラーは、かれらの行うことを御存知であられる。」（8章 39節）

【参考】ジハードに関するハディース（預言者ムハンマドの言行録：中田考氏訳）から

「アッラーの使徒は言われた。「おまえたちの財産と身体と言葉をもって、多神教徒たちとジハードを行え」」（アブー・ダーウード）

「アッラーの使徒は言われた。「私は人びとが『アッラーの他に神はない』と唱えるまで、私は彼ら（多神教徒）と戦うように命じられた。ただし人びとがそれを唱えれば、しかるべき場合を除き彼らの生命と財産は私によって保護され、彼らの精算はアッラーに委ねられる。」（ブハーリー）

3. 古典イスラーム法学におけるジハード論と「テロ」

①古典イスラーム法学におけるジハード論

・ *jihād* ~ 不信仰者との戦い、および不信仰者を撃退するために生命、財産、言論を捧げること。 cf.) *jihād* < *jahada* 努力する → 原義は「努力」

* なお、宣戦布告はイマーム（カリフ）の大権とされる

目的

a) イスラーム法が支配する法治国家の樹立と拡張。 カリフが宣戦布告。成人ムスリム男子の参加が推奨される

1924 トルコ、カリフ制を廃止 ⇒ a) のジハードは宣戦布告者が消滅

b) 異教徒の攻撃・侵入に対する 防衛戦争。侵入された土地に住む成人男子全員の義務

“カリフが不在でも「イスラームの家」を守る戦いは義務”

→ ムスリムによるイスラエル、米、ロ、中、印、比などへの「テロ」の論理

②今日のジハード（「テロ」）

- ・転機としての 1973 年～第四次中東戦争におけるサダト・エジプト大統領の「ジハード」宣伝（「反帝国主義闘争」がイスラームの戦いへと移行）

1979 ソ連軍がアフガニスタンに侵攻（東のジハード戦線形成～89 年：西側諸国、パキスタンを拠点に「ソ連軍へのジハード」を推奨・支援 ⇒アルカーイダ）

1982 イスラエル軍が南レバノンに侵攻（西のジハード戦線形成～現在⇒ヒズブッラー、ハマース、イスラーム聖戦）

*異教徒との戦い、異教徒からの独立闘争をすべて防衛ジハードと位置づける方向へ
& 「イスラームの支配地」を問題にすることで、ムスリムの同胞意識、著しく強化
⇒ 2003 年 3 月 スンナ派イスラーム教学の最高峰アズハル機構（@カイロ）のタンターウィー総長（当時）がイラク侵略軍への防衛ジハード呼びかけ

【参考】「多くの若者にとって、テロリストへの道は自宅のテレビから始まる。ボスニア、チェチェン、カシミール、パレスチナ。若者たちはテレビ画面に映し出された光景を見て、イスラム教徒が世界各地で追い詰められ、虐殺されていると確信する。宗教的熱情に駆られた彼らは、地元のモスクやインターネット上でイスラム防衛の誓いを立てる。そのなかには NGO（非政府組織）への寄付を募る者もいるが、飛行機代を工面してペシヤワルへ向かう者もいた」（『ニューズウィーク』日本版 2001 年 9 月 26 日号、クリストファー・ディッキー中東総局長）

【参考】一般ムスリムの考える「テロ」と「レジスタンス」

*ヨルダン大学戦略研究所（Center for Strategic Studies, University of Jordan）がシリア、レバノン、エジプト三国の研究機関と共同で実施した世論調査の報告書
REVISITING THE ARAB STREET RESEARCH FROM WITHIN より

表 1. アラブ諸国民が「テロ」と考える事件のランキング（2004 年）

事 件	ヨルダン	シリア	レバノン	パレスチナ	エジプト
イスラエルによるパレスチナ市民の殺害	90%	97%	88%	96%	91%
イスラエルによるパレスチナの農地と穀物の破壊	88%	96%	83%	94%	90%
米軍のイラク攻撃	86%	94%	64%	89%	87%
イスラエルによるパレスチナ人政治家の殺害	84%	93%	80%	94%	87%
イラクでの国連／赤十字本部の爆破	48%	78%	80%	36%	61%
サウディアラビアでの外国人住宅爆破	46%	73%	82%	28%	69%
モロッコでのホテル爆破	50%	72%	75%	30%	73%
9/11	35%	71%	73%	22%	62%
トルコでのユダヤ教シナゴーク攻撃	21%	54%	59%	13%	44%
イスラエル市民への攻撃	24%	22%	55%	17%	33%
ユダヤ人入植地への攻撃	17%	16%	42%	3%	17%

イラク駐留米軍への攻撃	18%	9%	28%	9%	14%
イスラエル軍への攻撃	7%	5%	25%	3%	9%
イスラエルに対するヒズボラの作戦	10%	3%	16%	2%	7%

表 2. アラブ諸国民が諸組織を「合法的な抵抗運動」と考えている割合

組織名	選択肢	ヨルダン	シリア	レバノン	パレスチナ	エジプト
イスラミック・ジハード運動 (パレスチナ：対イスラエル)	抵抗運動	87%	95%	62%	95%	82%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	3%
	知らない	2%	1%	3%	0%	8%
	その他	10%	3%	16%	4%	7%
ハマース (パレスチナ：対イスラエル)	抵抗運動	87%	95%	62%	94%	85%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	3%
	知らない	1%	1%	1%	0%	6%
	その他	10%	3%	18%	6%	6%
アルアクサー殉教者旅団 (パレスチナ：対イスラエル)	抵抗運動	88%	95%	55%	94%	86%
	テロリスト	2%	1%	19%	1%	2%
	知らない	1%	2%	4%	0%	6%
	その他	9%	2%	22%	6%	7%
ヒズブッラー (レバノン：対イスラエル)	抵抗運動	84%	96%	75%	92%	80%
	テロリスト	3%	1%	12%	1%	3%
	知らない	1%	0%	0%	1%	8%
	その他	12%	3%	13%	6%	8%
アルカーイダ	抵抗運動	67%	8%	18%	70%	41%
	テロリスト	11%	40%	54%	7%	31%
	知らない	3%	4%	1%	2%	8%
	その他	20%	49%	28%	21%	20%

「テロリズムに関する大半のアラブの考え方は「非戦闘員を標的にして、入念に計画された、政治的動機を持った暴力」という米国務省の定義とは相容れない。大半のアラブはむしろ、このような暴力——とそれを行行使する諸組織——を合法と考える。それが、彼らが脅威に感じているパワー、すなわち米国とイスラエルの政策と戦うための戦略の一つであるならば、アラブはテロリズムを、行為の性質よりも戦闘員たちの動機によって定義する傾向がある。特にイスラエルと米国に対する戦闘はしばしば合法的レジスタンスと見なされる。なかでも、西洋を恐れ、西洋に不信を抱いている人びとは、こうした戦闘を合法的なレジスタンスと考えやすい。」(p.71)

4. 分断への抵抗～欧米に暮らすムスリムが異教徒を意識して発信するイスラーム論

*Ali Shehata (ed. by Julie Samia Mair), *Demystifying Islam: Your Guide to the Most Misunderstood Religion of the 21st Century*, elysium river pr, 2007.

「人間がわからないことを恐れるのは周知の事実である。この恐怖は、極度に破壊的な否定的反応や時には永続的な憎悪につながる。イスラームを自分の宗教と言うばかりか、それが彼らの悪事を奨励しているとまで主張する人々による、西洋諸国民へのゾッとするようなテロ行為について知ろうとする西洋の多くの人びとをいま捕らえているのは、この種の恐怖である。これほど真実とかけ離れた話はないのに。本書が極めて重要なのはそれゆえである。

今日の世界には、ムスリムと西洋を勝者のない対立に駆り立て、両者の間にさらなる憎悪が生まれるのを見たいと願う輩がいる。彼らは演説や執筆活動を通して、聴衆や読者に恐怖と憎悪を掻き立てるような理由を休みなく与え続けている。ムスリム諸国であれ西洋であれ、至る所にそうした憎悪の証人を見出すことができるだろう。同様の集団は、教養の有無、性別、年齢を問わず、あらゆる言語、あらゆるエスニシティ、あらゆる国籍に見出される。憎悪のイデオロギーは彼らを結束させ、彼らはこの世界を永遠の戦争と分断 (division) 状態にするという悪夢のような目標に向かって動く。

こうした毒に対して世界が持っている唯一の武器は知識である。正しい知識だけが、われわれを統合するものがわれわれを分断するもの以上であることを (what unites us is far more than what separate us) 知らしめ、われわれの諸世界と諸文化が相互に評価し合えるところまで、両者の間の理解と寛容をもたらしてくれる。本書は読者にイスラームを、その核を成す文書——クルアーンと預言者ムハンマドの言行録ハディース——書かれ記録された神と預言者のことばであるとムスリムが信じているものから、より深く理解してもらうために書かれている。われわれはお互いを知ること、憎悪と恐怖の力に打ち勝ち、平和で友好的な美しい世界を実現できるという確信をもって本書は書かれている。」

(pp.1-2 Author's Introduction "Fear")

【問い】

7 世紀にイスラームがキリスト教圏に拡大して以来、イスラームは誤って暴力と戦争の宗教と見なされてきた。近年の中東での暴力や「9・11」によって、イスラームはさらにテロと不寛容の宗教として非難されているが、これは真実か？

【具体的な論点】

① ムスリムは異教徒をどう取り扱うべきか？

⇒ふつうの平和的な異教徒とは平和を維持し、敵とのみ戦うべし (クルアーン 2 章 256 節「宗教には強制があってはならない」、8 章 61 節「だがかれらがもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾き、アッラーを信頼しなさい」などを引用)。同意しない人々の殺害をイスラームが支持していないことは明らかで、ムスリムであれ非ムスリムであれ、彼らへの迫害や圧政を阻止するため、また戦闘に頼る前に可能なかぎり平和的な解決を見出すための注意深く思慮深いアプローチを命じていると主張。

② なぜイスラームはいつも暴力と結びつけられているように見えるのか？

⇒メディアの責任～犯罪や暴力事件は中南米が多いのに…ムスリムは非ムスリムの 7 倍もテロの犠牲になっているのに& テロの 98%は米国、西欧以外で起きているのに

*ムスリム移民は危険ではないと主張

③ 宗教や思想は少数の過激派の行動によって評価されるべきか、あるいは教典によって評価されるべきか？

⇒KKK や聖職者の児童性犯罪、ヒトラーの聖典解釈でキリスト教を評価するのか？ウルバヌス 2 世の十字軍演説とエルサレムでのムスリム・ユダヤ教徒大虐殺でキリスト教を評価すべきなのか？そんな考えに同意する人間はいないだろう。同様にイスラームも、神の名をかたって無辜の人々を殺害する超少数の過激派をもって評価されるべきではない。加えて、政府や教会がしばしば主導・支援したキリスト教の「殺し」と違って、イスラームの行動はほとんどが個人によるもの (政府も宗教権威も支援しない)

*イラク戦争時のタンターウィーによる防衛ジハードの呼びかけは無視

④ 宣戦布告はカリフの大権

カリフがいない今日、イスラーム世界が他国に宣戦布告することはできない。攻撃され

た時の自衛権は認められているが、攻撃するために他の主権国家に入るとはイスラーム法上完全に違法

*「9/11」など欧米での「テロ」は防衛ジハードではないと主張。占領地なら合法だが

【同書の問題点】無差別テロは非難するが、タンターウィーの防衛ジハード義務説やヨルダン大学の世論調査データはほぼ無視&防衛ジハードが支持される理由も語らない

5. 分断あるいは武力による世界統合を目論んだ「イスラム国 ISIS」

2003～2011 イラクのアルカーイダ系反米（&反シーア派）外国人ジハード組織

～後に旧フセイン政権の軍人・官僚（イラク人反米活動家）が中心に

2011～2013 シリア内戦で反シーア派ジハード組織としての顔が前面に

～サウディアラビアの反シーア派キャンペーンに影響された外国人

+内戦に乗じて実戦経験を積もうとする諸国のテロリストが参戦

2014 シーア派政権に不満なスンナ派住民の支持を得て、イラクでも急速に勢力拡大

6.29 「イスラム国」建国宣言、カリフ職復活宣言

⇒5年後にはかつてムスリムが支配したことのある地域すべてを支配し、いずれヴァチカンも征服する意志を示す～カリフがいれば拡張ジハード（侵略戦争）も合法

6. まとめ；分断と統合をめぐる、今日のイスラームが抱えている問題

・世界分断化の責任・危険がイスラームにあるとしたら、

①カリフがいれば侵略戦争も許されること？

*カリフ制廃止から100年。復活を望まれ続けたことを思えば、潜在的な危険アリ

②他方で、防衛ジハード思想については、思想があるから異教徒との分断が進むのではなく、まずは先行する分断のほうをなんとかすべきでは？ガザの悲劇はイスラームの責任ではなく、イスラームの責任と役割はパレスチナ問題の解決に努めることではあるまいか

③とはいえ防衛ジハード思想も、防衛し取り戻すべき「イスラームの家」をどう考えるかによって、世界を分断する「テロ」を産み出し続ける危険アリ

⇒取り戻すべき「イスラームの家」を「イスラム国」と同じように考えるなら、イスラエル国家の生存を認めることはできず、バルカン半島もクリミア半島も防衛ジハードの戦場になってしまう。だが、多様な解釈が許されていて、教義を確定する機関を持たないイスラームにこの問題を解決することができるのか？

【参考文献】

『日亜対訳・注解 聖クルアーン』改訂版、宗教法人日本ムスリム協会、1982年
飯塚正人『現代イスラーム思想の源流』（世界史リブレット69）、山川出版社、2008年
中田考「『イスラーム世界』とジハード——ジハードの理念とその類型」板垣雄三監修・湯川武編『講座イスラーム世界5 イスラーム国家の理念と現実』、栄光教育文化研究所、1995年、pp.199-229.